Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-11-01

Kernel通信

神戸大学附属図書館 電子図書館担当

(Issue Date)
2023-01-24

(Resource Type)
other

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100478238

神戸大学　学術成果リポジトリ　ニュース

Kernel 通信

第　28　号（2023 年 1 月）

第 28 号 有澤先生インタビュー

Kernel 通信では、学内の研究者の方々に、普段のご研究の内容や方法、図書館のサービス等についてインタビューを行い、その内容を紹介しています。今回は、人文学研究科の有澤知世先生にお話を伺いました。
（本インタビューはオンラインにて実施しました）

1. ご専門について
2. 戯作の読み方・おもしろさ
3. ご経歴・古典インタプリタとしての仕事について
4. 古典インタプリタという職やコロナ禍を経験して
5. 資料のデジタル化とオープンアクセス
6. 学生へのコメント
7. 神戸大学のイメージ
8. 附属図書館について

1. ご専門について

――最初に先生のご専門・研究内容について教えていただけますか?

有澤先生（以下、有澤）：専門は日本近世文学でして、特に 18 世紀から 19 世紀初めにかけての戯作[1]を研究しております。研究の対象は、山東京伝（1761-1816）という江戸の戯作者で、彼の執筆した読み物を主に扱っています。また京伝は江戸時代よりも前のことを研究して、「考証随筆」と呼ばれる研究書を執筆していたり、紙煙草入店を経営していたりとさまざまな分野で活躍していますので、そういった彼の営為全般に関心があります。

――先生と山東京伝との出会い、そして京伝を研究対象にしようと思われたきっかけを教えていただけますか？

有澤：近世文学の分野で卒論を書こうということになりまして、当時は近世文学についての知識がなかったので手当たり次第にいろいろなものを見ていました。そのなかで、山東京伝という人が 18 世紀末から 19 世紀の最初にかけていろんなジャンルを開拓していて、その時代の好みだとか幕府からの規制だとかに適応しつつ、常に第一線で活躍し続けたということを知って、かっこいい人がいるなと魅力的に感じました。また、京伝はもともと浮世絵師として活躍をしていて、そこから活動の範囲を広げて戯作者に

なったためか、本の挿絵だとか装丁が非常に凝っている点もおもしろく感じたということもあります。

――京伝の考証の研究は、考証について京伝が直接執筆したものを参照して進められているんでしょうか？それとも考証をもとに書かれた黄表紙[2]や読本[3]をもとにされることが多いんでしょうか？

有澤：大きく 3 つの研究の柱を設定しています。まず、京伝の戯作がどのような先行作品や資料を下敷きにしていて、どんな工夫をしているかということを明らかにするという研究が、1 つ目の柱です。
もう 1 つが考証についての研究でして、特に、19 世紀初頭における古画（古い書画）についての考証趣味のサークルに注目しています。京伝は、同じ趣味を持つ友人達から貴重な資料を借りたり、情報提供してもらったりしていたということが知られています。例えば、京伝の友人達が月に 1 回集まって開いていた古い珍しい絵を鑑賞する会の記録などを見ると、どういった資料が参照されて、どのような議論が交わされたのかがわかります。京伝はその会には直接参加はしていないんですけれども、知識の提供をしているということが記録からわかってきましたので、19 世紀の江戸の文化人たちの営為や考証の成果と、京伝の考証がどのように繋がっているのか、あるいは、それらはそれぞれがどのような独自性を持っているのかということを考えています。
それで、そういったものがどういうふうに戯作の中に活かされているのかを明らかにすることが 3 つ目の柱です。京伝は考証の成果を、非常に精緻な形で、引用元もしっかり示したうえで、先ほども述べた「考証随筆」という形にまとめているんですね。けれども、そういった考証の成果が戯作の中に入ってくると、いろんな演劇や挿話とないまぜにしたり、しっかり時代考証しているものをあえてアナクロニズム的に使ったりと、わりと自由な形で考証の成果を遊ばせているという点に、最近関心を持っています。一人の人間の営為のなかにいろんな棲み分けがあって、非常に大事な考証の成果を戯作の中で自由に扱うという事象を、その時代の知識人の在り方としてどのように考えれば良いのかな、という問いを持って研究しています。

――ありがとうございます。そういうことがわかったら、一層作品をおもしろく読めそうでいいですね。

有澤：ありがとうございます。最初にも申し上げましたけれども、京伝は、戯作の表紙ですとか装丁に非常に凝っていて、そういうところにも考証の成果が表れているというふうに私は考えています。ですから、ストーリーラインの確かさや、構造の緻密さに加え、多層的に仕掛けられた遊びをしっかり読み解いていくことが大事なんじゃないかなというふうに思っています。

――「異国意匠の取材源」[4]に書かれているようなことですかね。

有澤：はい。また、作品の表紙や見返し部分に古い資料の模写を入れたり、作品の内部の挿絵とは違うテイストの画風に変えたりということにも注目しています。

2. 戯作の読み方・おもしろさ

――先生は近世文学の読み方やおもしろさに精通されていると思いますが、例えば、これまでに近世文学を読んだことのない学生にお薦めしたい作品はありますか？

有澤：遊びの絵本がおもしろいなと思っていて、京伝作品ですと、『小紋雅話』という作品をよく学生に薦めています。これは、江戸時代に出版されていた、着物の布地の見本帳のパロディーで、洒落のデザインブックなんですね。例えば三角がいっぱい連なった鱗型模様というものがありますけれど、よく見ると鱗型に見せかけた焼きおにぎりの柄だったとか、そういう可愛らしい、ありそうでない柄が載っているんですね。もちろん文字が読めると一層おもしろいですけど、読めなくても、「何の柄かな」と考えながら眺めてもおもしろいなというふうに思います。
似たようなものでいうと、京伝の作品ではないですけど、『見立百化鳥』という、実際にはない鳥と木の取り合わせの図鑑もおもし

ろいです。例えば、ほうきが木になっていて、ちりとりが鳥になっている絵が描かれていて、それにもっともらしい解説がついている、というようなもので、木（き）と鳥（ちょう）、あるいは木（もく）と鳥（とり）のように、木と鳥という音に通じる日用・日常の生活の道具を木と鳥に見立てた遊びですね。こういった遊びの絵本は直感的におもしろいものなのでお薦めしたいなと思います。

――今ご紹介いただいた作品は、Web 上に上がっていて、内容を読むことができますか？

有澤：はい。デジタル化されていて、Web 上で読むことができます[5] [6]。

――この機会に初めて『江戸生艶気樺焼』[7]を読んだのですが、漫画みたいでおもしろかったです。一方で文章量も多いなという印象を受けたんですが、黄表紙などは大衆向けの文学だったんでしょうか？それとも、山東京伝には武士との繋がりもあったという話を聞いたことがありますが、こういった戯作類はどちらかというと、そういったある程度知識を持った階級が対象のハイソなものだったんでしょうか？

有澤：ありがとうございます。戯作はもともと、今おっしゃったようにハイソなものというか、知的な遊びです。黄表紙も狭い文化人サークルの中で生まれた遊びでして、武士だとか、高級町人といった、財力に余裕があったり、教養がある層の人たちが集まって、本業ではないんだけれども、遊びで古典等のパロディーみたいなものを書いたりだとか、自分達だけに通じる冗談やうわさみたいなものを絵本や読み物に落とし込んで、仲間内で楽しむという性質のものだったんです。それがだんだんと読者の層が広がって商業ベースに乗ってくると、ストーリーがわかりやすくなったりだとか、教訓的になったりだとか、作風が大衆向けに変わっていくんです。『江戸生艶気樺焼』は京伝の初期の作品なので、万人が同じように楽しめる話というよりも作者自身の周りの知的な人たちが読み解いておもしろがってくれることを想定した作品というふうに理解しています。

――ありがとうございます。読んでいてもその当時のことがわからないと、笑いどころがちょっと難しいなと思うことがあったんですけど、こういうのをおもしろく読むために何か知っておくことなどはありますか？

有澤：本当にこれが一番難しいことだなと思うんですけれども、今おっしゃったように黄表紙は漫画のような側面があって、絵が中心ですし、ギャグで埋め尽くされていて、あまり細かく読まなくてもおもしろいんです。けれども実はその中に、仲間内のうわさ話や流行語、時事ネタや、当時のお芝居を知っていた方がよく読めるみたいな仕掛けがしれっとまじっていて、そのために、単純に現代語訳しただけでは、現代人が同じようにはおもしろく読めないのだと思いますし、授業でも扱いづらいなと思うことがあります。言いながらちょっと思いついたんですけど、演劇の有名なシーンを踏まえているギャグが多いので、「名シーン」みたいなものを知っておくと良いかもしれません。例えば「仮名手本忠臣蔵」[8]という歌舞伎や浄瑠璃で上演される演目は、しばしば江戸時代の文芸に登場します。そういう有名な演劇作品を何か 1 つ 2 つだけでも観たり読んだりしておくことで、ちょっとクスッとなるタイミングが増えるかなというふうに思いました。

――15 回の授業でそういうことを学生に伝えていくっていうのは、なかなか難しそうな気がします。

有澤：そうですね。本当は考えなくてもおもしろい軽い洒落であっても、今はまず生活様式も変わってきていて、年中行事を知らないということもありますし、歌舞伎や浄瑠璃も身近な存在ではなくて、そこから説明すると、なんだか難しいうえにさらに難しくなったみたいなふうになって、本来の軽やかなおもしろさが伝わりにくいことがあると思います。

――戦後ぐらいまでは小説などでもそういったものを下敷きにした作品が多いようなイメージがあるんですが、最近はそういう作品が少ない気がします。

有澤：時代劇自体が少なくなっていますよね。「12 月 14 日」（赤穂浪士討ち入りの日）って言っても、誰も反応してくれなくて。戯作は、同時代の共通認識を使った遊びなので、現代人が同じ感覚で読むにはさまざまなリテラシーが必要になると思います。

――その点も踏まえて、授業のなかで意識的にそういった話題を絡めるなど工夫されている点はありますか？

有澤：今申し上げたようなことを全部テキストで説明するとイメージが湧きにくいので、なるべく浮世絵や映像といった視覚資料を使うようにはしています。また、初心者でも気軽に見やすい歌舞伎や文楽の演目を紹介したり、観劇ツアーを組んで学生と劇場に足を運ぶ機会を作るようにしています。

3. ご経歴・古典インタプリタとしての仕事について

――続いて、国文学を専攻されたきっかけ、そして大学院やその後の教員/研究者などアカデミアの世界に進もうと思ったタイミング、きっかけなどについてお聞かせいただけますか？

有澤：もともと中学・高校のころから日本の古典は好きだったということもあって、国文学科のある大学に進学しました。ずっと関心があったのは和歌や王朝文学で、『万葉集』も好きだし『源氏物語』も好きだし、卒論はそういった方向で書くつもりでいましたが、ゼミ選択の時に各専門の先生のお話をうかがう機会があり、江戸時代がいろいろなジャンルがどんどん花開いていくエネルギッシュな時代だということだとか、王朝文学や和歌といった古典を下敷きにした知的な遊びがあるというような、それまであまり触れてこなかった近世文学の魅力に感銘を受けて、近世のゼミで卒論を書くことに決めました。
大学院進学については、周りにあまり進学する人がいなかったということもあって、4 回生の時点では結構悩んでいて、教員採用試験を受けたり、一般企業への就職活動をしたりしていましたが、勉強を続けたいという気持ちが大きくなり、まずは博士前期課程に進学をいたしました。その 2 年間は将来の不安が大きかったり、なかなか査読誌に論文が通らなかったりというようなこともあって、もう研究をやめた方が良いかなと思ったことも何度かあるんです。けれども、わからなかったことが腑に落ちた時や、新しい問いに出会った時の知的な興奮が忘れがたかったり、研究対象の京伝について、自分ではなく、ほかの人が新しい論文をどんどん書いていくのを見るのは悔しいだろうな、と思い、結局博士後期課程に進学しました。その時点で、研究職につくことを目標にしましたので、博士後期課程での 3 年間は計画的に論文発表したり学振（日本学術振興会の特別研究員）に応募したりということをしておりました。

――その後なんですけれども、一般的には大学の教員ポストを目指して研究者になることが多いと思いますが、先生の場合、国文研の古典インタプリタという役職で就職されております。古典インタプリタという役職は、これまでなかった役職だと思います。また、古典インタプリタは、研究者として研究をしつつ、一般への宣伝も行うという二足のわらじを履くような仕事ではないかと思っているのですが、公募の時からこういう役職でこういう仕事をして欲しいといったような募集があったんでしょうか？

有澤：今おっしゃっていただいたように古典インタプリタというのは当時初めてできた役職で、国文学研究資料館というところで 2017 年 10 月に始動した「ないじぇる芸術共創ラボ」というプロジェクト[9]のために作られた仕事でした。そもそも国文学研究資料館は、日本で作られた古典籍を収集・調査・公開・研究している機関で、基本的には研究者に利用されてきた機関なんですけれども、ここ数年は、もっといろいろな形で研究者以外の人にも古典籍を利用してほしいというビジョンが強くなっています。「ないじぇる芸術共創ラボ」は、その一環として新設されたプロジェクトで、アーティスト・イン・レジデンスを行っていました。現代で活躍するクリエイターと研究者とが、古典籍をつかったワークショップを行いながら作品を生み出し、古典籍の活用の在り方の新たな可能性を見出していこう、ということを目標にしています。古典インタプリタという仕事は、そのサポート役といいますか、研究者とクリエイターの方の橋渡しを行なう役割を担うポジションとして考案されたものでした。私は、古典の世界と現代の

社会には、意外と地続きのところがあると思っているんですけれども、専門的な知識がないとそういうことを楽しめないというイメージがあったり、興味はあってもアクセスしづらかったりという問題があると考えています。それで、さまざまな立場の人が、自由にいろいろな楽しみ方ができる仕組みを考えたり、サポートしたりする仕事ができるのであればありがたいと思って応募しました。
ただ、実際はこのプロジェクト自体が新しくて実験的な試みだったものですから、実際には、当初想定していなかったようなことも担っていくことにはなりました。

――古典インタプリタとして先生の専攻とは全く違うことをされてる方々とコラボレーションしていろいろとやり取りをするうえで、苦労されたことがあれば教えていただけますか？

有澤：例えば現代演劇だとか、アニメーションだとか、現代アート、それから日本画とか、他言語への翻訳だとか、そういったさまざまな分野で創作活動をされている方とご一緒したんですけれども、こちらの知識不足というか、その業界の中で共有されている問題意識とか、仕事の進め方の慣習とか、そういったことが全然わからないなかで対話を始めることになったのが、最初の大きな壁でした。クリエイターの方が１ヶ月に１回くらい国文学研究資料館にいらっしゃって、どのような関心をお持ちなのかヒアリングしながら、専門家の先生をお呼びしてオートクチュールのワークショップを開催していくんですけれども、その調整や、ワークショップでの成果の発信を行うのが古典インタプリタの仕事でした。このプロジェクトは、クリエイターと研究者との対話の過程で起こる「化学反応」を大切にしていくものだったので、日々のワークショップの記録がとても重要です。しかし、クリエイターの方の発言の文脈や問題意識について無頓着なままだと、記録が散漫になってしまったり、うまくその次の点に結びつけることができなかったりとかいうことがあるため、こちらの言語を増やしていき、対話の過程をいろいろな視点で観察できるように心がけました。この点は、大学院で勉強してきたこととは違うチャンネルを持つことでもあって難しかったなと思っています。一方で皆さん非常にオープンな方で、こちらが門外漢であることもよくわかっておられたので、アトリエの見学をさせてくださったりだとか、作品を作る過程に参加させていただいたりだとか、とても暖かく迎え入れていただく場面が多かったので、体験しながら少しずつ勉強させていただきました。

――先生が国文研のロバート・キャンベル館長と出演されている YouTube[10]も拝見しました。古典作品に材をとっているとはいえ、コンテンポラリーアートのような作品について解説することは、日本文学の知識だけでは難しそうだなと感じました。

有澤：ご覧くださりありがとうございます。やはり発信の在り方の問題ですが、作品が出来ていればその作品について、アーティストの方がご自身で語られる機会もありますし、展覧会を開いたり、公演を行ったりして、そのことに関心がある方がたくさん見てくださると思うんです。けれども、まだ誰も見たことのない作品について、その前のリサーチや試行錯誤の過程を、古典籍との関係性が見えるように、古典インタプリタの言葉を通して伝えるという構造だったので、十分にできなかったところもあると思います。創作途中で予定が変わっていくこともしばしばあるので、そういったことがなるべくこぼれ落ちないように記録していったりだとか、私がわからないからといって切り捨てないようにするというようなことを、心がける必要がありました。ですから、自分の理解できる分野の言葉や枠組みの中だけで完結してしまわないように、いろいろとお話を伺ったり、その方のほかの作品を拝見したりすることで、なるべくその方の語彙だとか、作品へのスタンスを尊重しながら語りたいと考えていました。

4. 古典インタプリタという職やコロナ禍を経験して

――古典インタプリタとしていろいろと芸術家の方とのやり取りもあったと思います。実際、それまで博士課程で国文学を研究されてきたことと、古典インタプリタを経験した後で国文学なり研究なりに向き合う際の心境の変化などありましたら教えていただけますか？

有澤：はい。特に 2 つ大きな変化があったと思います。1 つ目は院生の時から研究成果や研究対象を、専門家の世界以外のところにも発信していきたいというモチベーションがあったのですが、むしろ、対話することの難しさ、大切さについてよく考えるようになりました。もちろん、まずは知ってもらう、見てもらうということもとても大事なんですけれども、「ないじぇる芸術共創ラボ」という取り組みは、新しい発信力ということだけではなく、日本文学の専門家ではない方々と一緒に、古典籍と現代人との新たな関係性の在り方を探る実験でもあったと思います。そういった試みの中で、異なるバックグラウンドを持っている人にボールを投げると、当然ですけれど、こちらが想定していない受け取り方をされることがありますし、こちらもボールの投げ方をもっと工夫する必要があるかもしれない。「わからないなりに、まずはお互いに聴く」という時間が必要で、どういう着眼点があるのかとか、何をどうおもしろいと思っているのかということを、お互いにわからないところを解きほぐしていくことで、対話が成立しはじめますし、新しい関係性が構築されるのではないでしょうか。対話を通して新しい知見に出会うということはもちろんですが、自分の専門性を相対的に見直し、より良い在り方を探る機会を得るという意味でも、違うバックグラウンドを持つ人に揺さぶられることは大切だと思います。
もう 1 つはコロナ禍をきっかけに考えたことです。私が古典インタプリタとして活動していた最後の時期に新型コロナウイルスが流行しはじめ、それがちょうど舞台芸術の方の成果発信を行うはずの時期でした。当時は、不要不急という言葉のもとに、舞台芸術が非常に弱い立場にならざるをえなかった時期で、劇場を開くための新しいマニュアルを作りながら、どうやって劇場を再開させようかとか、制限の多い中でどのような題材を選ぼうかということを、毎日考えている人たちと一緒に仕事をしていたので、必然的に、私が研究している戯作という分野の不要不急性ということについて考えることになりました。戯作というのは「戯れに作る」という文字どおり、遊びですので、基本的には二次的な存在で、生活に必要ということではありませんし、むしろその「無駄」が賞美されるものです。私は、戯作について考えることは人間の普遍的な欲求について考えることだと思っていますが、それを現代、しかもこういった非常に重苦しい状況のなかで、どう研究して、どこでどういうふうに発信していくのがいいのかなということについて、完全な答えは出ないなりに切実に考え、新しいやり方を試すきっかけをいただいたと思っています。

――ありがとうございます。コロナになってから演劇などの舞台芸術もしばらくできないなどの影響があったと今おっしゃられましたが、例えば研究の方でも、他の大学研究機関図書館に行けないなどの影響があったかと思います。そのあたりのことについてお伺いできますか？

有澤：いくつか他大学で使える利用者カードがあったんですけれども、当時はどこの機関もそうだったと思いますが、まずは所属してる方を優先するという方針で図書館を開けておられたと思うので、気軽にここにこの本がないから違うところに行こうということがしにくくなったなとは思います。

――通常の本であれば図書館だと ILL 相互貸借や文献複写など、非来館型のサービスがあります。ただ、古典籍などの貴重だったり、古くなったりしている資料になるとそういう対応ができないことが多いと思うのですが、そういった理由からもともと直接来館して資料を閲覧するという機会が多かったんでしょうか？

有澤：そうですね。そのとおりでして、仕方ないことですけれども、開館時間だとか開館日数を制限されていたので、それを限られた研究時間のなかで、ふらっと気軽に寄って本を手に取るということが、しづらくなったところがあるかなと思います。

5. 資料のデジタル化とオープンアクセス

――先生も神戸大学の古典籍の電子化に関わってこられていますが、そういった状況のなかで、コロナで図書館に行けなくなったときに、そういった電子化された古典籍を利用されましたか？

有澤：はい、非常によく活用させていただいています。私は江戸時代の版本を主に扱いますけれども、同じタイトルであってもバ

ージョンが違えばいろいろな情報が違うので、例えば今手元にある本だったり、今週末に見に行こうと思っている本が諸本の中でどういう位置にあるのかということを、いながらにして手軽に確認できるようになったということは非常にありがたいことです。コロナ禍以前から活用しておりましたけれども、こういった状況になってますます便利に使わせていただいています。

――ありがとうございます。古典籍はデジタルアーカイブのものを利用されているということですが、例えば学術論文、特に国文学の分野のものは、まだデジタル化されたものが多くはなく、製本された雑誌を利用される機会が多いのではないかと思っています。J-STAGE[11]だったり、他の大学のリポジトリだったりといったものも活用されているんでしょうか？

有澤：そうですね。ネット上で見られるものに関しては非常に便利に使わせていただいています。

――先生自身が研究成果を論文として公開される際に、論文をオープンアクセスで公開したいとか、できればしたいんだとかいう思いがあれば、お聞かせいただければなと思います。

有澤：国文学の分野も、まだ Web 上で紙面が公開されている雑誌ばかりというわけではないんですが、バックナンバーから順次オープンアクセスにしてもいいか、という問い合わせが来ることも多くなってきています。そういった場合には、私もオープンアクセスの論文を便利に使わせていただいている立場でもありますし、その方が自分が過去に何を書いたかというのがすぐに見られてありがたいので、積極的にオープンアクセスにしていただくようにしております。
一方で、Web でアクセスできる資料のいい点でもあり、ちょっと気をつけたくもある点として、目的のものに一直線に行けてしまうので、その前後の関連論文が見えにくくなってしまう、ということがあると思います。例えば製本されている雑誌を図書館に探しに行くと、自分の探す論文に至るまでに、「こんなものもあった」というふうに勉強できることがあると思うんですけれども、資料を探す道中で寄り道がしづらくなったので、意識して目次を眺めてみる、といったことをしなきゃいけないな、というふうに思っています。学生と接していても、どうしてもキーワード検索をして出てきたものをつまみ食い的に読んでしまうところがあるなと思っていて、リテラシーを養わなければいけないですね。私も、検索して出てきた情報がいい情報のように感じてしまうことがあるので、気を付けなければと思いますし、授業でもなるべく案内をしていくようにしたいなと思っています。

6. 学生へのコメント

――今、リテラシー能力を養ってほしいと学生への思いを語られました。先ほどマスターのときに査読誌に論文が通らないこともあって研究をやめようと思ったこともあるとおっしゃってました。ご自身の経験も踏まえて、学生、特に研究者を目指される学生に伝えたいことがあればお願いできますか？

有澤：やってきたことがすぐには実らなくても、後で自分の助けになることがあるなということを最近感じています。例えば、昔授業を受けていたころのノートだとか、ちょっと書きかけてやめてしまった論文になる前の段階のノートや資料に、書き込んであるメモなどを見返すと、先生がおっしゃっていたのはこういうことなのかなと改めて解釈できたり、昔は出来なかったけど今こういうふうにしてみたらどうだろうと考えたりして、新しい研究のヒントを得るということはよくあります。ですから、是非ノートをとっておいて、忘れたころに見返してみてほしいなと思います。それから先ほどの古典インタプリタの話じゃないですけれども、自分の専門分野以外のことにも関心を持っているということが、違う分野の研究者の人との対話に繋がり、それが共同研究に発展していったり、研究者向けではない媒体で発表したり、そういった新しい機会に恵まれた時に大事になってくると思います。私自身の反省もあってそう思うんですけれども、最短距離で何かすぐに成果が出るものだけが大事なんじゃなくて、寄り道してその時にはちょっとよくわからないことというのも、後々自分の糧になることがあるなというふうに思います。

――ありがとうございます。

7. 神戸大学のイメージ

――先生が神戸大学に来られて 2 年ほどになられます。コロナ禍でいろいろ研究も大変だったと思いますが、神戸大学の印象ですとか、学生や同僚の先生方の印象などについてお伺いできますか？

有澤：学生は本当に真面目で、勉強が好きな子が多いなというふうに感じています。地道に努力できる学生が多くていつも感心させられますし、コメントカードの質も高く、刺激をたくさんもらえるので、授業の励みになっています。
先生方とはなかなか直接お目にかかれない時期が 1 年くらい続いていたんですけれども、最近になって、ドイツ文学の久山先生[12]をはじめとした若手の先生方と神戸雰囲気学研究所（KOIAS）[13]を立ちあげました。雰囲気学という新しい学問領域を創出・展開する共同研究なのですが、哲学、心理学やドイツ文学、美学など様々な専門分野の先生方のなかに、私も日本古典文学の担当として加えていただいています。同僚だけど全然違うことを研究されている先生方と、いろいろな問題設定をしながら対話することができて、新しい研究を進めていけるという風通しの良い環境で、新しい扉を開けていただいてありがたいです。

8. 附属図書館について

――では、最後になりますが、図書館について、何か感想であったりですとか、要望であったりですとか、あるいはこういうことを一緒にしてみたいですとかありましたらお伺いしたいと思います。

有澤：まず、本当に職員の方は大変だと思うんですけれども、開館時間を延ばしていただいていて、教員はもちろん、学生が非常に便利に使わせていただいていることに御礼申し上げます。特に今、空き教室を自由に使いづらかったりだとか、学内での居場所が限定されているなかで、本に囲まれて自習できる空間が確保されてということが本当にありがたいことだと思っています。それから、図書館に新しく入った本だとか、職員や教員のおすすめの本がいつも目につくところに紹介されているのが楽しくて。目的の本だけでなく、「あ、こんな分野の本があるんだな」っていうふうに手に取るきっかけを作っていただいていることがありがたいです。
これは、要望というよりも今後そういうことができたらいいなということなんですけれども。私は古典籍を扱う研究をしているので、非常に優れたコレクションがたくさん大学にあり、そして最近はそれらをオープンデータにしていただいてありがたいのですが、同時にせっかくその現物が図書館の中にあるので、神戸大学のコレクションを授業で活用したいなというふうに思っています。その一環で、例えば資料の扱い方を学ぶ授業を図書館の中でさせていただくような機会があるとありがたいなと思いますし、同時にデータベースの使い方やリテラシーを養うような授業がしてみたいです。今後、図書館の方々にも教えていただきながら、私自身も学生と一緒に学ぶ機会を作っていければいいなというふうに思っています。

――ありがとうございます。特に後半の授業の中で図書館員も入っていってリテラシースキルを向上させるという点については、図書館としても目指したいところなので、是非よろしくお願いします。

有澤：はい、よろしくお願いします。

――古典籍については、先生が授業で使われるとおっしゃったら、おそらく貸し出すことはできるのかなと思います。ただ、確かに貴重書庫の中などに学生たちも入って古典籍に触れる、ということはこれまでなかったことだと思うので、その辺も確かに実現できるといい機会になるだろうと思います。例えばですけれど、神戸大学震災文庫というスペースが社会科学系図書館内に設置さ

れている[14]んですが、今日もそこに文学部の先生が学生を連れてこられていて、そこで阪神・淡路大震災に関する授業をされていました。それを踏まえて、人文の図書館の中で授業すること自体は可能だと思います。貴重書室となるとハードルは上がるかもしれないですけども、いずれにしても人文科学図書館の職員に相談していただければと思います。

有澤：なるほど、ありがとうございます。図書館の中で授業させていただけるというのはすごくありがたくて、少人数の学生であれば、図書館の中でそれがどんなふうに保管されていてどのように扱うべきかということを一緒に学ぶ機会が作れたらいいなというふうに思ったので、ぜひ相談させていただこうと思います。それから、神戸大学の優れた古典籍のコレクションを高精細のデジタル画像として公開してくださいますが、そういった資源を、学生がもっと活用できるように、何か教員ができることがあれば教えていただきたいのですけれども、いかがでしょうか。

――これはこちらとしては、どちらかといえば先生にお願いしたいなというところがあります。図書館としてもなるべくそういったものは広報するようにしているんですけど、どうしても広報がネックになっているように感じています。以前から図書館では情報リテラシー関連のガイダンスなどを開催しているのですが、そういった図書館ガイダンスの参加者にアンケートを取ってみても、図書館が発信した情報を見て参加したという学生より、先生に参加を勧められたから参加したという学生が多かった印象があります。ですので、授業の中で、神戸大学のコンテンツに限らずですが、デジタルアーカイブの Web サイトなどを紹介していただくと、学生の方も反応が良いのかなと思っています。もちろん図書館としても引き続き努力はしますが、先生と協働して広報していくことが、学生に働きかけるうえでは結構有効なのかなと思っています。

有澤：ありがとうございます。図書館で授業を行う取り組みと同時に、大学のリポジトリの存在を、学生が活用できるような形で授業の中で紹介したり、使う練習をしたりしていきたいと思います。

――ありがとうございます。あらかじめお声がけいただければ、情報リテラシー係というリテラシー教育専門の係の職員や、人文科学図書館の職員がその授業に参画してリテラシー教育的なガイダンスを行うことは可能だと思います。こちらとしてもそういった機会をいただけることはありがたいことだと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

有澤：ありがとうございます。こちらこそ、よろしくお願いいたします。

インタビュー：附属図書館 大場, 平林, 和田, 有馬（2022.11.14）

[1] 江戸時代中期ごろに発生した新様式の散文の総称。もともと知識人の知的遊戯であり、後に広い読者を獲得した。

[2] 戯作のジャンルのひとつである草双紙（絵本）の一種。画主文従のスタイルで、当世風俗を反映させた滑稽やむだを旨とする。

[3] 戯作のジャンルのひとつで長編の読み物。勧善懲悪などをテーマとし、ストーリー性の高いものが多いのが特徴。

[4] 有澤知世. 京伝作品における異国意匠の取材源―京伝の交遊に注目して―. 近世文藝. 2016, 104, p. 101-115. https://doi.org/10.20815/kinseibungei.104.0_101

[5] 山東京伝. 小紋雅話. 新日本古典籍総合データベース. https://doi.org/10.20730/200011820

[6] 漕川小舟. 見立百化鳥[1]. 九州大学附属図書館. http://hdl.handle.net/2324/1001602795

[7] 山東京伝による黄表紙。書名の読み方は「えどうまれうわきのかばやき」。心中などで浮名を流す色男にあこがれる醜男の

艶二郎が金に糸目をつけず浮名を流そうと奮闘するが、ことごとく失敗に終わる。
[8] もとは浄瑠璃の作品。赤穂藩主浅野内匠頭長矩が江戸城松の廊下で高家旗本吉良上野介義央を切りつけた赤穂事件に材を取り、時代や人物設定を、南北朝時代の軍記物『太平記』に移して、仇討ちの一部始終を扱う。近世をとおして様々な文芸に利用された。現代でもしばしば上演されるほか、スピンオフ作品も多く愛されている。
[9] ないじぇる芸術共創ラボ. https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/
[10] バーチャルギャラリーツアー「ないじぇる芸術共創ラボ展　時の束を披く」. https://youtu.be/5EoKwVrLdPc
[11] J-STAGE. https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/
[12] 教員紹介「准教授 久山雄甫」. 神戸大学大学院人文学研究科・文学部. http://www.lit.kobe-u.ac.jp/faculty/yuho-hisayama.html
[13] 神戸雰囲気学研究所（KOIAS）. http://www.lit.kobe-u.ac.jp/koias/
[14] 神戸大学附属図書館「震災文庫」. https://lib.kobe-u.ac.jp/da/shinsai/